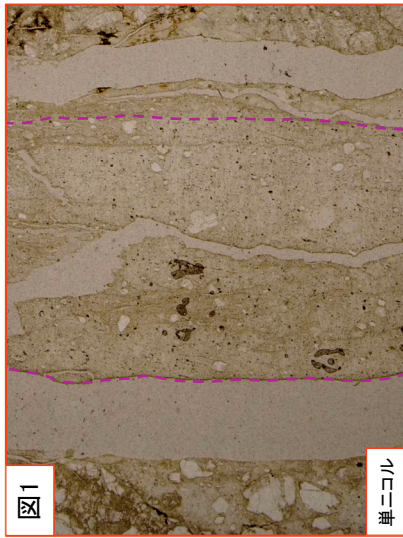
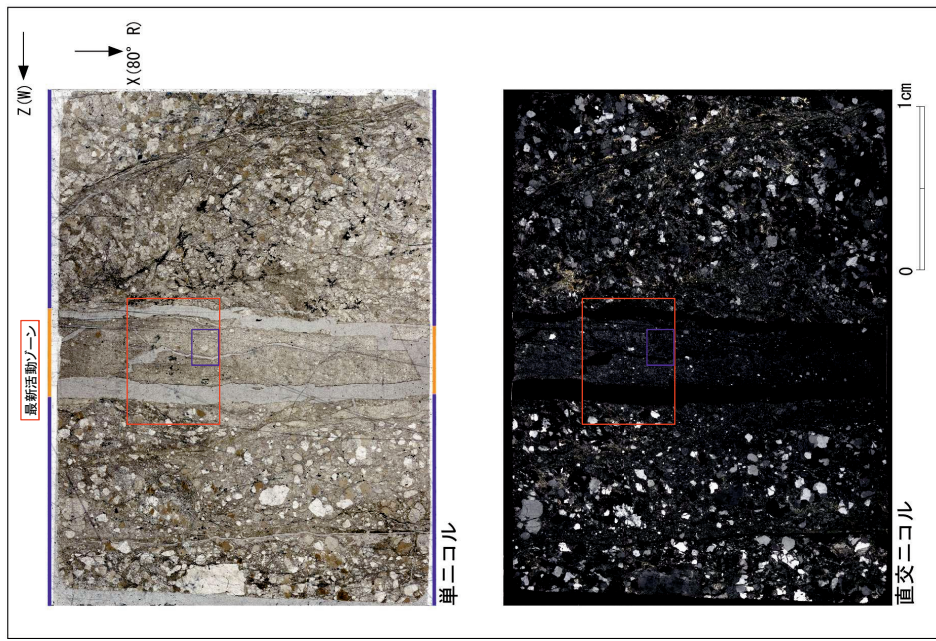
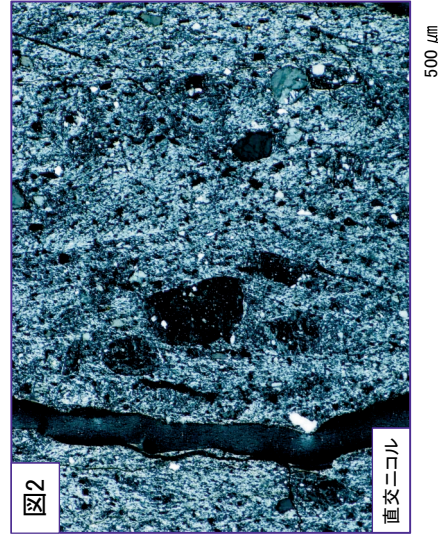
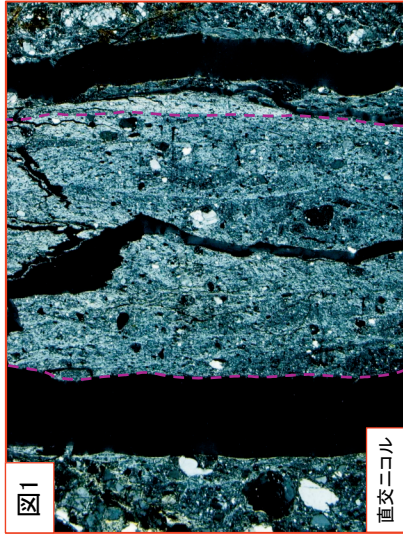
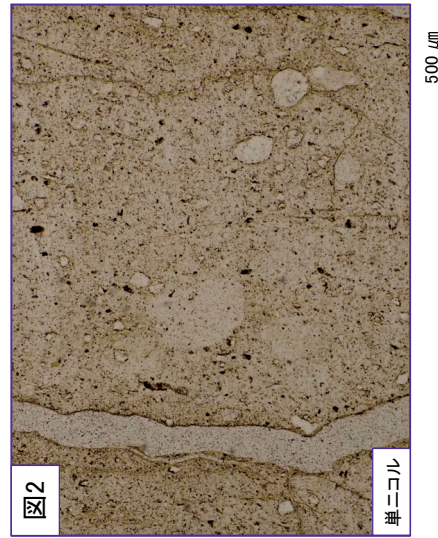


- 最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
- 基質は粘土鉱物を主体とする。(図2)
- 粘土状部の分布は帯状で直線的である。(図1)
- 岩片は少ない。(図2)
- 丸みを帯びている岩片が多い。(図2)

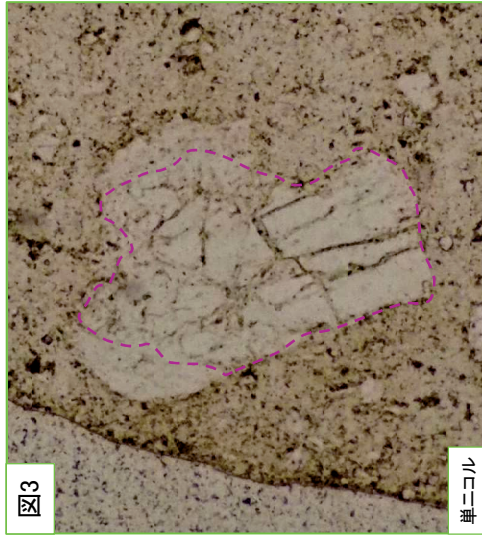
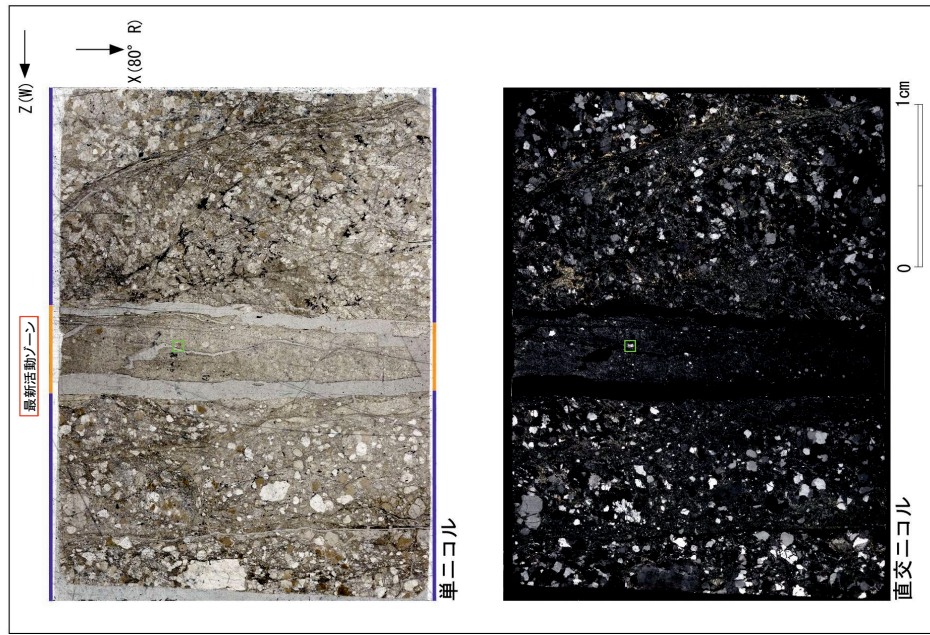


破線は帯状で直線的な粘土状部の範囲を示す

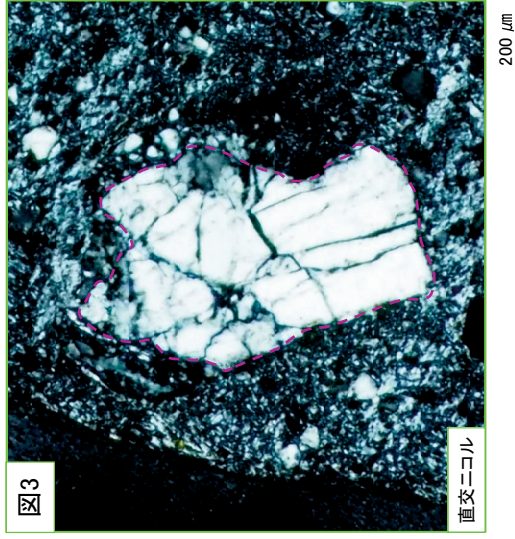


- 凡例
- 断層ガウジ
- カタクレーサイト

最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
 > ジグソー状の角礫群が認められる。(図3)



破線はジグソー状の角礫群の範囲を示す



(肉眼観察結果 深度12.87m)

- 肉眼観察では、粘土状部は、やや硬質で、細粒部の連続性及び直線性が良い。原岩組織が認められる岩片を主体とし、基質は細粒化した岩片からなる組織が認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。

(観察位置)

- 薄片試料は、肉眼観察により認定した断層面βに沿って最も細粒化した部分を含み、人為的な試料の乱れの無い部分で作製した。

※断層面βは最新活動面

(薄片観察結果)

- 薄片観察では、以下の通り断層ガウジの特徴が認められた。

- 基質は粘土鉱物を主体とする。
- 粘土状部の分布は帯状で直線的である。
- 岩片は少ない。
- 丸みを帯びている岩片が多い。

- 薄片観察では、以下の通りカタクレーサイトの特徴が認められた。

- ジグソー状の角礫群が認められる。

最新活動ゾーンには、断層ガウジとカタクレーサイトの特徴が認められるが、カタクレーサイトの特徴は、カタクレーサイトが断層ガウジに取り込まれたものと考えられる。

以上より、薄片観察結果では、最新活動ゾーンの細粒部を断層ガウジであると判断した。



(総合評価)

当該破砕部については、以下の理由から断層ガウジであると評価した。

- 肉眼観察で確認された粘土状部は、その特徴から断層ガウジであると判断した。
- 薄片観察で確認された最新活動ゾーンの細粒部は、その特徴から断層ガウジであると判断した。

断層ガウジ・ 断層角礫の有無	断層ガウジ・ 断層角礫の幅[cm] *	明瞭なせん断構造・ 変形構造 *
有	0.5	有

*:断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「有」の場合は肉眼観察結果を記載。
断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「無」の場合は「-」と記載して括弧内に肉眼観察結果を記載。

第7.4.4.316図 (6) 破砕部性状 H24-D1-2 深度12.38～12.97m (断層岩区分の総合評価)

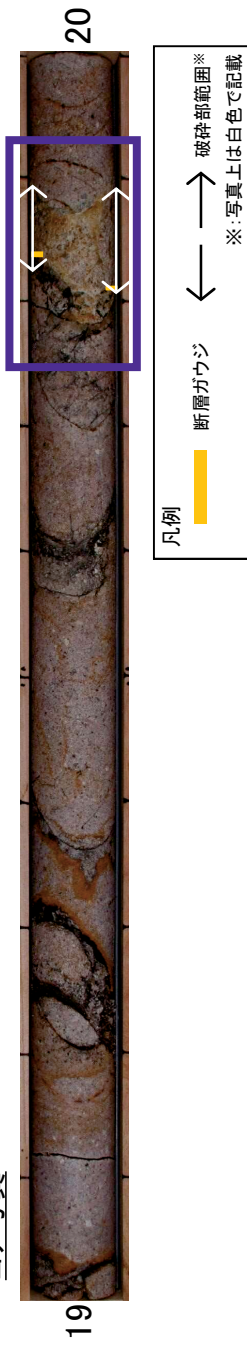
・深度19.78～19.87mの「粘土混じり礫状」と記載の箇所については、やや硬質で、含まれる細粒部は網目状に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化される。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。

・一方、深度19.82mには幅1mm以下の細粒部が挟在しており、幅が狭いため、肉眼観察では原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかった。これらのことから断層ガウジとして扱うこととした。

ボーリング柱状図

●19.78～19.87m：破砕部
粘土混じり礫状部 (Hj)
上端53°，下端63° ともに直線的でシャープに連続する。径1～3mmの石英粒と径5mm前後の粘土化した花崗斑岩の岩片を含む。やや硬質。浅黄橙色を呈する。幅10～50mmと膨縮する。
19.82mに幅1mm以下の灰白色粘土を直線的に挟在する。

コア写真



細粒部が網目状に分布する

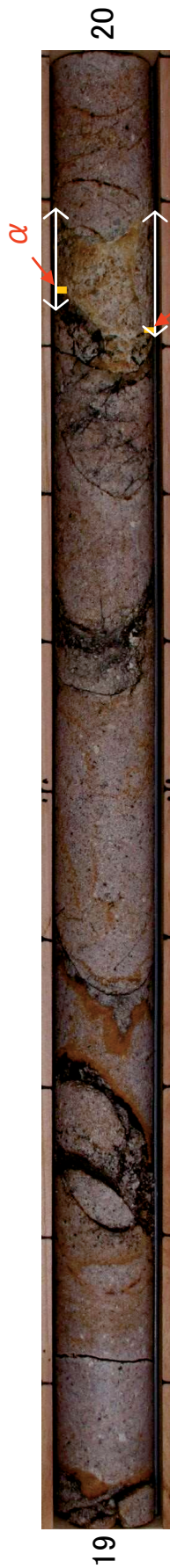
深度19.82mの幅1mm以下の細粒部



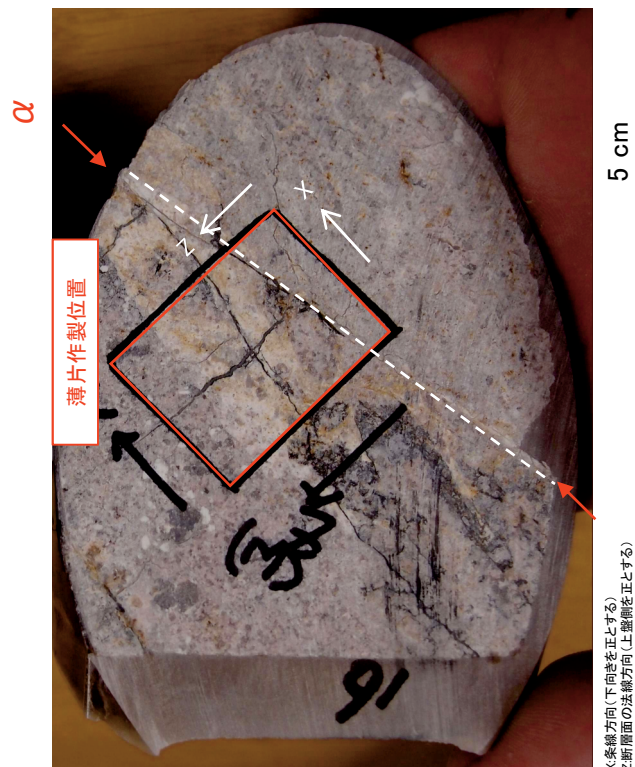
・薄片は断層面 α 及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。細粒化は、断層面 α に沿った幅1mm以下の範囲のみ。

コア写真

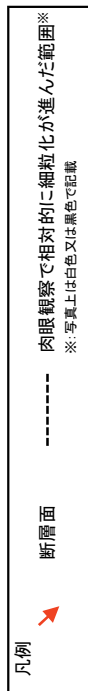
※断層面 α は最新活動面



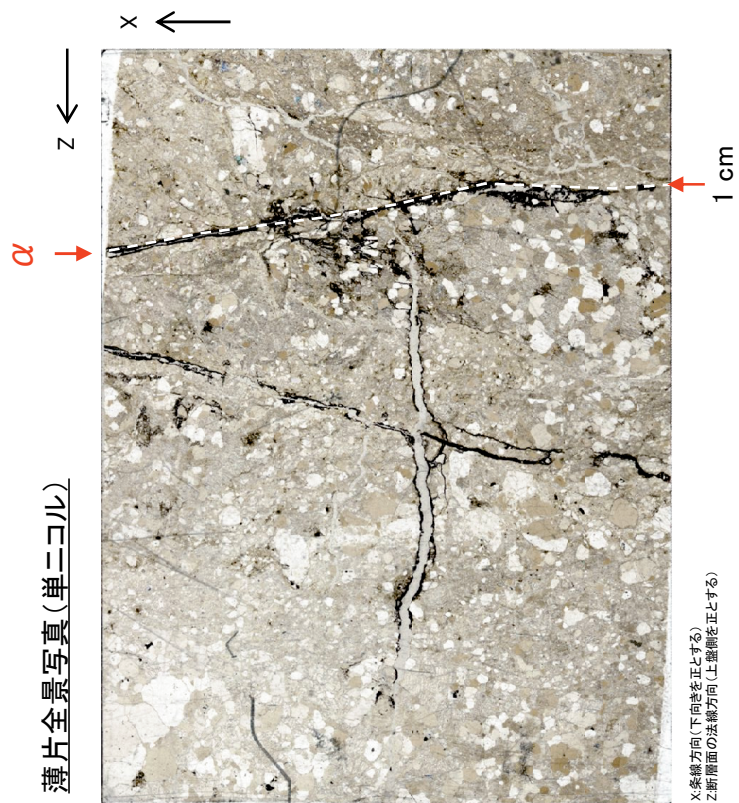
薄片作製位置写真



X: 巻線方向(下向きを正とする)
Z: 断層面の法線方向(上盤側を正とする)



薄片全景写真(単ニコル)



X: 巻線方向(下向きを正とする)
Z: 断層面の法線方向(上盤側を正とする)

